

# 『征服者』の新旧両版の異同 に関する覚え書

沢 田 閑

## I 新旧両版の成立事情と訳書

1925年、香港および広東において、ゼネストが発生した。つづいて同年7月、広東に国共合作の革命政府が誕生する。当時、<sup>ホワンブー</sup>黃埔軍官学校校長だった蔣介石も、孫逸仙（1925年3月、北京で没）の後継者と目された<sup>フーベン</sup>胡漢民（1886—1936）も、共産派の<sup>リアナチヨンカイ</sup>廖仲愷（25年、国民党右派に暗殺される）も、ともに協力してこの革命において活躍した。

当年24歳の青年マルロー（André Malraux, 1901— ）も、この革命運動に関係していた。しかし、マルローが、実際にどの程度の役割を果たしていたのか、いまに至ってもくわしいことはわからない。国学院大学の橋本一明教授の手になる詳細な「年譜」<sup>①</sup>によれば、マルロー自身は国民党委員ないしは国民党政府宣伝委員代理の地位にあったというけれども、広東国民党委員の公式リストには彼の名は見あたらぬそうである。

マルローは、この《広東革命》における見聞を素材にして、1928年、『征服者』（Les Conquistadors）を発表した。それ以前の若干の習作的作品をべつにすれば、『征服者』は作家マルローの長篇第一作になる。N.R.F.誌に連載されたこの作品は、直ちに Grasset 書店から単行本として刊行された。

① 中央公論社版『世界文学』第41巻 所収。

『征服者』の邦訳は、現在までのところ、3種類ある。第一は、直接マルローと交友を保ちつつ広汎な政治活動に加わっておられた故小松 清氏（1900—1962）の筆になるものである。小松氏は、1932年からこの小説の翻訳に着手され、34年、改造社からこれを出版されたという。現在は1952年初版発行の新潮文庫版が一般に流布している。

小松氏の訳書は、その後、全面的に現代表記に改めるなどの処置がとられ、1961年、筑摩書房発行の『世界文学大系』第59巻におさめられた。——この訳書は新潮文庫版のものと、本質的に大きな差異はない。ただ注目しなければならないのは、作者マルローの、この小説にたいする『追記』が訳載されていることである。

第二の邦訳は、日本大学の長塚隆二助教授のご労作で、1962年、角川文庫本の一冊として出版された。訳者の「解説」によれば、マルローが『追記』を補足して1949年 Grasset 社から刊行した《決定版》を底本にしておられるという。

最後にくるのは、1964年秋に出た中央公論社版『世界の文学』第41巻の一部としておさめられた拙訳である。このさい、テキストとして1960年刊行の Pléiade 版を用いた。訳出にあたっては、両先輩の邦訳を参照し、大いに啓発される点があったことは言うまでもない。またさらに、幸い関西日仏学館の図書室から、1928年の Grasset 版の借出しも許された。ほかに、1956年、The Beacon Press から出版された Winifred Stephens Whale の英訳《The Conquerors》も参照した。これは名訳のほまれ高いものだそうで、巻末には Jacques Le Clercq 訳の《Postface》が付せられている。

これらの準備をととのえたうえで、私は、私なりの解釈と訳文のスタイルをもって、勇躍翻訳にとりかかったものである。

ところで、まことにうかつなことながら、こうして新旧の éditions をならべて訳出するときになって初めて、私はこれらのあいだに大きな差異のあることに気づかせられた。《テキスト・クリチック》は、文学作品の研究・翻訳についてごく初歩的な心得であり、若干の語句の訂正だけの問題ならば、わざわざ訳書完成までの私的な事情に類することを長々と述べた必要はあるまい。

しかしながら、1949年《決定版》の刊行にあたって、作者マルロー自身の手によって加えられた修正の筆は、作品全体の芸術的効果、ならびにマルローの思想的変化という見地からして、相当に重大な問題をふくんでいると思われる。とくに後者は、毛沢東が蔣介石を台湾に追いおとそうとしていた時点、そしてスターリン批判が開始される以前の時点において、マルローが自己の思想的立場を明らかにした『追記』をつけ加えたという事情と相ま<sup>②</sup>って、ことは重大である。

私の気づいたかぎりでは、新版になって削除された部分は19ヵ所、書き加えられた部分が3ヵ所、そしてこまかい修正が1ヵ所ある。

訳書作製にあたって、旧版をとるべきか、新版に従うべきか、私は最後まで迷い、出版社側と何度も相談したうえで、新版の1960年版 Pléiade によったような次第である。

いま、邦訳書ならびに英訳書について、それぞれの原著にたいする準拠の仕方を整理してみると、

1. 旧版の本文のみのもの——新潮文庫版。
2. 旧版の本文に『追記』を加えたもの——Beacon 版、筑摩書房版。
3. 新版の本文と『追記』を併載するもの——角川文庫版、中央公論社版。

---

② 『追記』の骨子となったものは、1948年3月、パリのプレイエル会館で行なった講演『知識人へのアピール』である。

である。以下、新旧両版の異同箇所を指示しつつ、できればその修正についての作者の意図を推測してみようとするのが、本稿の目的である。——どういうわけか、ふつうは Variantes の調査については懇切丁寧であるはずの Pléiade 版が、Malraux の巻には全く Notes を付していない。（この巻には《Les Conquistadors》、《La Condition humaine》、《L'Espoir》の三篇が収録されているが、本文だけおさめて、Introduction や Notes のたぐいを一切排除しているのは、あるいは作者の意志に従ったのではあるまいかとも推測される。）また、マルローの研究書についてても、『征服者』の「修正」をとりあげたものは見あたらずようだ。とすれば、新旧両版のちがいを明らかにしておくことは、訳者としての義務であると思われる。

Pléiade 版と Grasset 版を比較しつつ、異同箇所の原文をあげておけば用は足りるわけだが、あるいはフランス文学専攻以外の方でも、マルローの《変貌》について興味をおもちになる向きがあるかもしれないと考え、以下に、主として筑摩書房版と中央公論社版（以下、「中公版」と略称する）との比較においてその場所を指摘する。

## Ⅱ 異 同 箇 所

### A) エピソードの省略、ないしはストーリーの単純化のための削除部分

『征服者』は、全体が『接近』、『権力』、『人間』の三部に分かれている。そして省略部分は大半、作中の「私」が中国大陸に上陸するまでの第一部『接近』に集中している。

その中でとくに、エピソードを省略し、ストーリーを単純化して文学作品としての緊密度を高めようと意図したらしきと思われるものを、ここにあげる。——ただし、この項目と、次項の「登場人物の単純化」とは必ずしも厳密には区別できない。あくまで便宜的な分類にすぎない。

- (1) 筑摩版 p. 238 中段23行目（「六月二十六日 シンガポール……」）から、p. 243 下段26行目（「あと六日ばかり……。」）まで。
- (2) 同上 p. 246 中段6行目（「しかし打ち明けた話をすれば……」）から、同ページ下段16行目（「……相当いましたっけ。」）まで。
- (3) 同上 p. 252 中段22行目（「蛾におおわれた高い街灯……」）から、p. 253 上段22行目（「……部屋にただよってくるのであった。」）まで。
- (4) 同上 p. 258 上段4行目から、7行目まで。（「ラジオがきびしく検閲されて……そのままである。」）
- (5) 同上 p. 258 下段21行目（「私も岸に上がった……」）から、p. 259 下段6行目（「……ハンドルがはずされてある。」）まで。
- (6) 同上 p. 260 中段1行目（「十一時。若干のシナ新聞を……」）から、p. 261 上段12行目（「……釣銭を渡さなければならない。」）まで。
- (7) 同上 p. 266 上段20行目から、22行目まで。（「こいつが英国人をびくびくさせるのは火を見るよりも明らかだ。<sup>③</sup>」）
- (8) 同上 p. 267 中段27行目（「六時。船のブリッジ……」）から、p. 268 中段5行目（「残るのは広東だ！」）まで。

以上はすべて、第一部『接近』のなかにふくまれるものであるが、第三部につぎの1ヵ所が見いだされる。

- (9) 同上 p. 314 下段13行目（「ちょうど出かけようとしていたところへ……」）から、p. 315 上段4行目（「……やっと新聞記者を送りだしておいて」）まで。

作者のマルロー自身の手によって施されたこの種の削除は、どういう意

③ この一句は、Pléiade 版には見あたらないが、おなじく新版によったという角川文庫版には訳出されている（p. 46, 5行目）。大した問題ではないが、どうしてこういう差異が生じたかは、ちょっとわからない。

味があるのだろうか。

以上のうちで、(4)、(7)、(9)の削除はそれほど重要ではない。また、英国人義勇軍と戦う元子社工作人員たちの非合理的な戦いぶりが、ジェラルルの口によって紹介されるくだりが一部省略されている(2)も、その前後の文章で十分意をつくされている。

問題になるのは、その他の箇所——(1)、(3)、(5)、(6)、(8)である。これらはいずれも、作中の「私」が広東に着くまでの途中の見聞と感想を簡略化したものだ。とくに大きな削除は(1)であり、6月26日のシンガポールでの経験が完全に落とされ、新版での「私」は、6月25日の船上での体験から29日のサイゴン滞留へとまっすぐとぶことになる。この間の削除部分は、新潮文庫版でいえば約12ページ分にあたる。

この種の削除がどのような性質のものであるかを例示するために、比較的短い(3)の全文をここに書きうつしてみよう<sup>④</sup>。サイゴンにおける経験の一部である。

戦におおわれた高い街灯。交錯して走る砂地の道路——これがサイゴンである。いくつかのフランス風の大通りをスピードをかけて通り過ぎて土人街にはいる。

はじめじめした草。草。草。

かびっばい壁。庭園。流れでるような密生した植物といくらかの棕櫚の樹。しだいに遠ざかる別荘の灯火。

そのうち、運転手はまたしきりと警笛を鳴らした。通行人が雑踏してくる。安南人の小店の階下の光に、せま苦しくつめこんだ人影はぼんやりとしている。ここでは、南アジアは胡椒と魚の匂い、はじめじめし

④ 小松清氏の訳文のスタイルについては、私なりの意見がないではないが、ここでは、それは問わない。ただ、固有名詞の表記については、沢田の方法に統一させていただく。

た空気と下駄のかん高い音で感じられる。

また街を去る。十分ばかり森の香を潜りながら疾走する。

二つの道の辻に出る。歩行路のない砂地の足場に車がとまった。すぐさま安南の辻君がばらばらと車に寄りそってきた。

「旦那。一ぺん十スウよ。」

アラビア人の番人のどなり声とその姿に、女たちは追い払われる。番人の背後に低く一軒のわら葺きの家が見える。

「旦那さんお二人！ お二人よ。」

われわれが敷居をまたぐと安南の女が叫んだ。

「ジェラルール君、われわれの身でこんなところに来て大丈夫ですか？」

「ああなあに。コーチシナジャ、その心配はご無用さ。」

ここは一種のカフェで、めいめい胴着をつけ、白いズボンをはいた安南の淫売婦がいる。そのうちの二人がわれわれのテーブルにやってきたが、ジェラルールの手振りひとつで引きさがあった。

床は地べた。壁と屋根は茅葺き、籐のテーブルの上にはシャンペンのびんを入れる器がある。女主人が挨拶にでてきた。まだうら若い安南の女、美人だが、肺病やみらしい。ほほえむとまぶたがひとりでにしまる。

「疲れてるんかい、え、チャー・サオ？」

「あの畜生ども、まるで骨を折らすんですよ……」

と、どっと笑いながら出てゆく植民地の下士官の群を、ぐったり垂れた手で指さしながらチャー・サオは答えた。

われわれは飲んだ……。ジェラルールは酔っているとは思わない。が、彼がなにか説明することのできない、肉体的な快感を味わっているように感じられる。

女たちがわれわれの周囲をいったりきたりする。われわれのいる部屋のうしろには、まだいくつかの部屋がある。

仕切りをとおして中音でうたわれる軍歌やだらけた拍子が聞こえてく

る。そのうちに一人去り二人去りして隣室の人びとはでてゆく。

ジェラルムが黙ると、熱帯の蟬の音が音律もなく、ただキイッとがった笛の流れのように、たえず、同じ調子にむすばれて部屋にただよってくるのであった。

こういう省略は、「私」が早く中国大陸に上陸し、ガリーヌとともに革命活動に参加できるようにと、もっぱら《まえおき》の部分を簡略化したものであることは明らかだ。しかし、芸術品としての統一・緊密性がより高度になり、純粋なものに煮詰められたとしても、それがはたしてそのまま、作品の効果を高めるものとなりうるかどうかは、なかなかむずかしい問題である。作家は若い時代には（マルローがこれを書いたとき27歳であり、また『征服者』は彼にとっての長篇第一作だったことを思いだしてほしい）、自分の知るかぎりのものを作品に投入しようとして、ともすればその作品は混沌とした印象を与えがちである。——そして、混沌と純粋のいずれに作品としての価値を認めるかは、個々の作品に接した場合の芸術批評のうえで微妙な問題であるだろう。

『征服者』について言えば、第一部のこの項目にあたる削除部分は、なるほど本質的なストーリーの展開にはさほど意味をもたず、またのこされた部分だけでも十分《東洋》の雰囲気は伝えられているかもしれない。しかし、東洋の混沌・猥雑さ、そのわきたつような雑踏を伝える描写は、わざわざその数をへらす必要もなかったのではあるまいかと思われる。それが西欧人の目にうつった《東洋》であり、若者のいきいきとした目で新鮮なおどろきを感じているのであるならば。

マルローの文学は《ルポルタージュ文学》であるとよく言われるけれども、『征服者』は、のちのスペイン内乱を描いた『希望』（1937年刊）と同列に論ずることはできない。『希望』のばあいは、作者の目はニュースカメラマンのカメラの目よろしく、いそがしげにうごきまわる。個々の場

面はカメラの移動力の優秀さを立証するものであろう。しかし、そもそも《ルポルタージュ文学》なるものがすぐれた文学でありうるかどうか、私は疑問に思う。その点、『征服者』のそれぞれの場面は、《場面》としてはくりかえしになるかもしれないけれども、作中の「私」の興奮といらだち——そして作者自身のいらだちと狂熱、を表現するためには、反復があってもよかったのではないかと思うのである。

それから、引用の(3)には、他とは異なるもうひとつ別の意味がある。

マルローはもともと女性をほとんど描かない作家である。それに加えて、ここの省略は次項の(a)とも関係するけれども、たとえ《淫売婦》とのかかわりあいにはすぎないとしても、これをけずってしまったことで、新版では女性の登場する場面はわずかに2ヵ所だけになってしまう。ガリーヌが中国人娼婦ふたりと同時にねているところへ「私」がとびこんでいく箇所（中公版 p. 96—97）と、虐殺されたクラインの死体にその愛人らしい女がとりすがる場面（同上 p. 135）である。

Claude Mauriac は、その著の半分をマルローの作品におけるエロスの側面の研究にささげているけれども、作家マルローの対女性観は興味ある研究テーマのひとつであるだろう。

### B) 登場人物の一部省略ないしは単純化

さきにもことわったように、この項目と前項との区別はあいまいである。たとえば、前項の(1)が削除されたために、ロシアの元美術蒐集家のレンスキーが新版では姿を消してしまっている。またこの項目の削除も、「ストーリーの単純化」には大いに役立っているわけである。

しかしまず、前項の例にならって、本項目に該当すると思われる削除箇所を指摘することから始めよう——

---

⑤ Claude Mauriac: «Malraux ou le mal du héros», 1946.

- (a) 筑摩版 p. 257 上段14行目から、27行目まで。（「なにを話していいか……そうすると…….」）
- (b) 同上 p. 261 下段8行目（「それだってたやすく売れない…….」）から、p. 262 上段24行目（「……無我夢中のていたらくよ.」）まで。
- (c) 同上 p. 262 中段4行目（「さてと、話の本筋に…….」）から、p. 263 上段11行目（「……目も光っているしね.」）まで。
- (d) 同上 p. 263 中段1行目（「間話の話じゃ…….」）から、同ページ下段17行目（「……階下に下りた.」）まで。
- (e) 同上 p. 264 上段25行目（「しかし、彼らだって…….」）から、同ページ中段4行目（「……注意書が廻ってきてなかった.」）まで。
- (f) 同上 p. 264 中段14行目から21行目まで。（「うん。が、まあ公平に……銃殺されるだけですんだのだ.」）
- (g) 同上 p. 265 中段22行目（「われわれの仕事が…….」）から、同ページ下段4行目（「……まあ、こういったところだ.」）まで。
- (h) 同上 p. 271 上段12行目（「この程袋<sup>チコンタイ</sup>という存在が…….」）から、同ページ中段9行目（「……別のノート.」）まで。

ここまではすべて、第一部に属する部分である。つぎの(j)は第二部、(k)は第三部に所属する。

- (j) 同上 p. 316 下段16行目（「クラインと私は…….」）から p. 317 中段8行目（「……ガリーヌを待っていた.」）まで。
- (k) 同上 p. 345 上段15行目（「いや、ガリーヌって男も少し過ぎるんだ…….」）から、同ページ中段2行目（「……横に振らなかったろうな.」）

---

⑥ 翻訳にあたって、中国人名をフランス語から転記するについては、本学の吉田恵教授にずいぶんご面倒をおかけした。

まで。

見られるとおり、以上の10ヶ所の削除部分のうち、(b)から(g)までの6つは、香港で会った「私」とパリの機械工出身のオルグであるムニエとが対話している場面である。広東に到着するまでの「私」が——そして、読者が——ムニエによって、革命の全貌についての予備知識を与えられる箇所だ。従ってこれは、「登場人物の単純化」というよりも、むしろ「副人物の会話の単純化」といった方が正確なのだが、作品全体の構成から見て、この削除はさほどの影響を与えるものとは思われない。それどころか、ムニエの話の内容は、スタティックな立場で《革命》をとらえようとする場合の作者の目のあまさが露呈されている感じで、削除はむしろ有効であった。

ニコライエフから見たガリーヌ像を一部けずった(k)も、ジェラルルの《不能》をうんぬんする<sup>⑦</sup>(a)の削除も、あまり重要ではない。(b)は、程岱に関する予備知識を提供する『機密報告』だが、これも実際に程岱が登場してくれば十分理解できる範囲の内容である。

これらに比して、(j)を落としたことは少し残念な気がする。ドイツ革命家のクラインがコミンスキーを暗殺したとき、短刀ではなく、拳銃でやりたかったと語るくだりだ。これはのちに、クライン自身が剃刀で惨殺される(中公版 p. 134-135)ことの伏線になっていた。

ところで、この項目に属する削除はどういう働きをするものであろうか。(j)の削除によって、コミンスキーという人物がこの作品のなかから姿を消した。おなじく削除された(f)のなかには、白衛軍指揮官でクラインに銃殺されるウンゲルン・スタンバーク男爵がいた。その他、レンスキーの名

---

⑦ この部分は、次項でもう一度ふれる。

が消えたことはさきに言ったし、許崇智<sup>シユウシヤンチ</sup>將軍の名も新版にはない。

——ここで、少しわき道にそれるけれども、『征服者』における登場人物のありかたについてひとこと言っておかなければならない。のちの上海革命を素材にした作品『人間の条件』（1933年刊）や、『希望』でもおなじことだが、マルローの小説には、実在の人物と fictif なそれとがまざりあって出てくる。『征服者』の場合について言えば、ポロディンや蔣介石<sup>リヤオヂョウソクカイ</sup>、廖仲愷<sup>リョウチュウカイ</sup>、孫文の子孫科<sup>ソンワン</sup>などが実在の人物ということになる。<sup>⑧</sup>

こういう実在・非実在を問わず、新版では、彼ら副人物の数を少なくし、またその活動の幅をなるべくせまくすることによって読者の目がまっすぐガリーヌにだけ吸いつけられるようにした、というのが作者の意図であると推測される。そして言うまでもなく、作中の「私」の目は、旧版におけるよりも、もっとまっすぐに、もっと純粋にガリーヌに注がれることになるのである。

ここで、前項でもふれた《ルポルタージュの手法》とも関係のあることだが、『征服者』における「私」の目とはなんであろうか、を考えてみたい。

Germaine Brée と Margaret Guiton の共著のなかでは、この「私」という語り手をすばらしい青年だとひとことほめているけれども、必ずしもそうも思えない。「私」の目は、しばしば等身大の人間の目とは思えない場合がある。あるいは、非人間的な——《非情な》という意味ではない——カメラの目である。または、妙な言い方をすれば、目と目の間隔がちょっとひらきすぎている感じだ。

⑧ このために、訳出にさいして、中国人名の実在・非実在をつきとめるのには、だいぶ苦勞した。作者の中国音表記が正確かどうかもわからない。『人間の条件』には、日仏混血の清・ジゾールという青年や、日本人の蒲画伯<sup>カマ</sup>などというのが登場する。

⑨ G. Brée and M. Guiton: « An age of fiction », 1957. (佐藤朔, 若林真訳 『小説の時代』 紀伊国屋書店)

それが、「私」の目がガリーヌにむかってひたと注がれる場面だけでは、人間らしい熱気をおびる。この小説のラストシーンで、「私」とガリーヌが抱きあうのは象徴的である。作者マルローは、そういう《目》の持主ではないのか。『王道』（1930年刊）の主人公クロードの目も、より強者である冒険家のペルケンにむかってしっかり注がれている。

長塚助教授の説によれば、後年、第二次大戦中に（1944年）初めてマルローがド・ゴール將軍に出会ったとき、將軍は「やっと私はひとりの男にめぐり会えた！」と叫んだという<sup>⑩</sup>。橋本教授は、『征服者』の「私」や『王道』のクロードは《弟子のタイプ》だと言っておられる<sup>⑪</sup>。マルローがド・ゴールに注ぐ目も、男と男のあいだのそういう賛美のまなざしなのであるまいか。ド・ゴール政権下におけるマルローの政治的役割を論ずることはもちろん大切だが、それとならんで、マルローのパーソナリティについても綿密な調査の結果を知りたいものだと思う。

### C) ちいさな修正ひとつと Beacon 版における脱落

中公版 p. 64 下段 7 行目の「ヨーロッパ人兵士」という語は、旧版では「英国兵」となっている（筑摩版 p. 290 上段 20 行目）。これはもちろん、それぞれのテキストに忠実な訳である。

ところで、広東革命の当面の敵は英国人であり、たまたまこの箇所ではそれがポスターのなかの悪役をふられているからと言っても、とくにこの場所でだけ《英国》をぼかす必要もなかったのではあるまいか<sup>⑫</sup>。——ちいさなことだけれども、こういう訂正が誰の手で、どういう手続でとられたのか、ちょっと知りたい気がする。

⑩ 角川文庫版『征服者』解説 参照。

⑪ 中央公論社版『マルロー』解説 参照。

⑫ Beacon 版は旧版によっているから、もちろん《British soldier》という語を使っている。（p. 79, l. 17）

Beacon 版には、新旧両版と対照してみても、納得のいかない脱落部分が 3 ヶ所ある。

(i) これは A の(3)で、ジェラルドが淫売婦のところへ出かけていく場面とも関係があり、B の(a)でそれを話題にするなかの一部だが、旧版による筑摩版でつぎの 6 行分にあたる箇所 (p. 257 上段 21 行目から 27 行目まで) がぬけ落ちている。Beacon 版の p. 30, l. 28 につづくところだ。

「というのは、不能ってことなんですか？」

「へえ、まあそこらあたりでしょうな。先生はもう駄目なんですよ。でなくとも、まあそんなところでしょう。ただおかしいことはね、先生いつも身のまわりに女がいなくて駄目らしいんですな。そうすると……。」

(ii) これはあまり重要ではないが、ガリーヌの身上調書に関する部分で、中公版 p. 48 下段 7 行目から 8 行目にかけて（「精力的だが……笑わせる」）の 2 行分が脱落している。Beacon 版 p. 62, l. 31 につづく箇所である。

(iii) Beacon 版 p. 154 の l. 26 と l. 27 とのあいだには、大きな脱落がある。実は、Beacon 版の脱落といっても、(i)、(ii) だけの問題ならわざわざとりあげる必要もないのだろうけれども、(iii) の省略はどうしても意識的なものとみなさざるをえない。中公版でその場所を指摘すれば、p. 141 上段 6 行目から同ページ下段 12 行目まで（「おれが言おうとするのは……ばかげた幕あき」）である。ガリーヌが「私」に語って聞かせるエピソードだが、アフリカ駐在の囚人部隊で、何人もの仲間が寄って若い兵士を凌辱する場面である。

この (iii) の部分が訳出されていないことから考えると、(i) の 6 行ほどはたして careless なまちがいがいったとして見すごしていいかどうか、気

になってきた。——外国の文学作品を英訳する場合、こういう箇所はふつうにオミットされるのかどうか、英米文学関係の先生方にお尋ねしたいと思うのである。<sup>⑩</sup>

#### D) 新版における追加部分

新版になって書き加えられた3ヵ所というのは、いずれも、第三部『人間』に集中している。例によって、まずその場所を指示しておこう——

- (イ) 中公版 p. 138 上段12行目（「しかし、クラインはトロツキストだったよ。」）
- (ロ) 同上 p. 146 下段16行目（「これは口実である……」）から、p. 147 下段7行目（「……もっと従順なほかの人間と。」）まで。
- (ハ) 同上 p. 149 下段12行目（「君はまるきり理解していないよ……」）から、p. 150 下段9行目（「……彼のような人間の時代はもう終わりに近づいている。」）まで。

クラインと言え、この作品のなかでは、革命に参加した人物群像のうち、ガリーヌが最も共感をいだいている革命家のひとりである。（もうひとり、アナキストとして、むしろのちには敵対関係に立つ中国人青年の洪だ。）ガリーヌとクラインは、ほぼ平行して《革命》のなかに没入してきたと言ってよい。——そのクラインについて、「私」の口を通してではあるが、《トロツキスト》という明確な限定を書き加えたことは、なかなか簡単に無視しうるものではあるまい。

もうひとつ、(ロ)のなかから、少々長いけれども以下の文章を引用してお

⑩ そのほか、些細なことながら、Beacon 版において、明らかな誤訳をひとつ発見した。開巻まもなく (p. 2, l. 17) の “The dealers in cotton and horses...” は、《Les marchands de coton ou de *cheveux* ...》の見あやまりであろう。この種の《誤訳》は、後学の者をなんとなくほっとさせてくれる。

きたい——

ガリーヌが信ずるのはエネルギーだけだ。彼は反マルクス主義者ではない。が、彼にしてみれば、マルキシズムは断じて《科学的社会主義》なんぞではない。それは、労働者階級の情熱を組織するための方法である。労働者から突撃隊を選抜するための手段にすぎぬ。ポロディンは、辛抱づくよくコミュニズムという建物の基礎を築きあげる。ガリーヌに対しては、先の見通しをもたないとか、自分の行く先もわかっていないと非難する。勝利を得れば——それがいかに輝かしい大切なものであろうと——偶然の勝利にすぎぬと攻撃するのである。いまでもやはり、ポロディンの目からみれば、ガリーヌは過去の人間に属する。

ポロディンが先の見通しを立てて動くことは、ガリーヌもよく承知だ。が、ガリーヌの信ずるところによれば、ポロディンの予測は間違っており、コミュニストとしてのその執念は、やがて国民党内の程岱派チロツタイより奇妙に勢力のある左派をして、反ポロディンの線に結集せしめるだろうという。ついには、彼らによって労働者義勇軍は壊滅させられるだろうと考えるのだ。

またガリーヌは（おそすぎるかもしれぬが……）、コミュニズムもすべての有力な主義主張と同じく、一種の仲間同士の默契にほかならぬと見ぬいていた。ガリーヌが必要な人物でなくなるやいなや、《規律》の名において、ポロディンはためらうことなく彼を他の人間と更迭せしめることであろう。おそらくガリーヌほど有能でないにしても、もっと従順なだれかほかの人間と。（下線は沢田）

この作品が最初に世間の目にふれた旧版においても、作者は、ガリーヌが個人主義的情熱に根ざすところの《革命家》であることを、くりかえしことわっている。マルロー自身、20世紀前半の大きな革命的動乱のまった

だなかにはしばしばその身を置き、とくに1933年ごろから1939年の独ソ不可侵条約締結のころまでは Kommunismus に近い線にいたことは、まぎれもない事実だ。しかしながら、マルローはもともとマルクシストでもなんでもなかったということも、今日、各評家の一致した見解となっている。マルローのことを、生まれながらのファシストだと称する者もあるという<sup>⑭</sup>。

マルローは、はたして本質的にファシストなのか、あるいは真正の《革命家》だったのか。——この点については、かつてマルローがいくつかの文学作品を通して与えた《時代》に対する証言と、のちの実際政治家としての面とを別に考えなければならぬ日が、やがてくるかもしれない。しかしその《文学》においても、上の例にみられるように、現在のマルローは、マルクシズムを現実政治の場での力学関係にすぎぬものとする考えを強化し、それを旧作に付加しないではいられなかったらしいと推測されるのである。

### III 結 語

初めに書いたように、『征服者』が最初に発表されたのは1928年のことであり、その後、作者自身の手による加筆訂正があって《決定版》が刊行されるのは1949年——つまり、ほぼ20年のちのことになるのである。

修正の方法とその効果をいくつか要約してみると、以下のごとくである。

- 導入部の枝葉の部分を大幅にカットし、ストーリーを単純化した。《作品》としては洗練されたかわり、青春の熱気は減少したとも見られる。
- 副人物を整理して、読者の注意がより多くガリースに集中するようにした。

---

⑭ Pierre-Henri «Simon : L'Homme en Procès», 1950 参照。

○ ムニエの口から語られた《革命》にたいするいささか未熟な俯瞰的考察はすがたを消した。

○ 「私」たちが嬉々として革命のなかで動きまわっていた印象はやや後退し、かわりに Kommunismus にたいする批判的姿勢が前面に押し込まれてきた。

さきにも述べたように、この小説の翻訳にあたって、新旧いずれの版をとるべきか、私は大いに迷ったのであるが、『追記』もあわせて訳出することが最初からきめられていたから、やはり新版に従うことにした。

『征服者』にたいする『後記』は、パリのプレイエル会館<sup>⑮</sup>でマルローが「ド・ゴール派の盟友たちを代表して」しゃべった講演が中心になっている。そしてこの『追記』が上述の新版と併載されて1949年以降の《決定版》になったのであるから、『追記』を訳す以上、新版に従わなければ意味がないはずである。前章のDにあたる「追加部分」も、当然、この『追記』と照応する性質のものであろう。<sup>⑯</sup>

マルローの《変身》は、いかなる性質のものであろうか。

この問題については、サルトルの場合とはちがいが、寡黙なマルロー自身の口からはなかなか答えてはもらえまい。しかし、『追記』の内容を一言にしていえば、スターリン批判が進行しはじめる以前のソビエトにたいする、執拗なまでの攻撃である。とすれば、中ソそれぞれにたいする友好ムードあふれる現下のド・ゴール大統領のもとで、大臣マルローは何を考え、何をしようとするのだろうか。ゲーテ、シャトーブリアンの時代は知らず、

⑮ 注② 参照。

⑯ その点、旧本文のみを訳載している新潮文庫版はともかくとして、旧版と『追記』を併載しながら、どこにもことわりがきをしていない Beacon 版と筑摩版は、読者にたいして公正を欠くように思われる。

現代にあっては、文学によって栄光を得た者が政府与党の大物にのしあがっても、《文学者》としてはけっして幸運なことではありえまいと私は考える。

しかし、該作品の翻訳者としての責任から、新旧両版の《異同》を報告し、その意味をあれこれ推測してきたにすぎぬ私としては、もはやこれ以上の臆測はつつしみたいと思うのである。

(1966年10月10日 脱稿)